

大和文華 第八十九号

本文

- | | |
|----------------------|--------|
| 大和文華館所蔵の新羅印花文陶器について | 高川 慎一 |
| 土佐光起筆「林和靖梅鶴図」三幅対について | 中部 義徳 |
| 谷文晁筆「神奈川風景図」をめぐって | 成瀬 不二雄 |

作品解説

- | | |
|------|-------|
| 閻相師像 | 藤田 伸也 |
|------|-------|

原色図版

- | | |
|-----------------------|--------|
| 林和靖図（部分・林和靖梅鶴図三幅対のうち） | 大和文華館蔵 |
| 神奈川風景図 | 大和文華館蔵 |
| 閻相師像（部分） | 大和文華館蔵 |

単色図版

- | | |
|--------------------|--------|
| 印花文銅類壺 統一新羅時代* | 大和文華館蔵 |
| 印花文骨壺 統一新羅時代 | 大和文華館蔵 |
| 林和靖図（林和靖梅鶴図三幅対のうち） | 大和文華館蔵 |
| 梅図（林和靖梅鶴図三幅対のうち） | 大和文華館蔵 |
| 鶴図（林和靖梅鶴図三幅対のうち） | 大和文華館蔵 |
| 閻相師像 | 大和文華館蔵 |

大和文華館 発行

大和文華

第八十九号

大和文華館

作品解説

閻相師像（紫光閣功臣像の一つ）

大和文華館蔵

中国・清時代 乾隆二十五年（一七六〇）作 一幅

絹本着色 縦一八七・四 横九六・二釐（賛とも）

本図は平成四年度の新収品で、中国清時代の武人肖像画である。

画の上部に別絹の墨書が付され、そこに「領隊大臣甘肅提督閻（閻相師）」という像主の名前が記されている。この絹の中央上端には「乾隆御覽之宝」の楕円印が捺され、右半分は漢文、左に満州文字を配しており、清朝宮廷の公的な絵画であることがわかる。

賛は像主の官位姓名に続いて功績を大書し、最後に乾隆庚辰春に廷臣劉統勳（一六九九—一七七三年）・劉綸（一七一—一七三三年）

于敏中（一七一四—一七九九年）の三名が勅命を承けて着賛したことを記す。乾隆庚辰は乾隆二十五年（一七六〇）にあたり、画もこの時に制作されたと考えられる。

閻相師について、図の賛文は、「庫車（新疆省）を攻めて、その城門に迫った時、石が額に当たったけれども一歩も動かなかったため、これを見た人々は驚嘆した。葉爾羌（新疆省）の戦いでは敵の隙を突き、要害を排撃した。その姿は雄偉で、函谷関以西の叛乱を鎮めるのに足るものであった。」と簡単に記述する。閻の字は閻と同じで各種の文献は閻相師と表記しているのでここでも閻相師と表

記する。

さらに、『清史稿』の伝（卷三一六）によって閻相師の伝記を補うと、彼は高台（甘肅省）出身の漢族で、軍隊に入って昇進を重ね、準噶爾部を討った時、雪で迷ったふりをして敵陣に入り込み、兵五百をもつて敵方四千人を殲滅させるという功績を挙げた。ついで回族の平定でも功があり、花翎を賜った。花翎とは、孔雀の羽根で作った装飾のことで、清朝では特に軍功のあるものがその榮譽に浴した。この図の帽子の後に付いているのがそれである。

ついで回族の叛乱鎮圧に参加し、領隊大臣を授かった。この時に敵の拠点庫車を包囲し、額に石を受け傷を負うという事件が起きたのであろう。その掃蕩作戦に成功し、安西提督、次いで甘肅提督に任ぜられた。やがて都に凱旋し、皇帝に拝謁を許され、銀貨を賜り、その姿が絵に写され、紫光閣に掲げられた。

また、閻相師は武人として勇壮だけでなく、生まれつき善良な性質で、親や兄弟思いでもあった。また、自分の居所には灌漑を整備し近隣の数百戸がその恩恵を蒙ったという。没後、太子太保を遺贈され、桓肅の諡を賜っている。

その紫光閣に掲げられた閻相師像がこの画である。閻相師は花翎を後に垂らした帽子を戴き、鎖帷子を着、腰に刀と弓および矢を入れた鞆を帯び、左を向いて威儀を正している。眉間にある傷痕は庫車での武勇談の証であろうか。洗練された乾隆朝の宮廷絵画らしい、衣裳の鮮明な彩色と西洋画を思わせる写実的な面貌表現が印象的な

肖像画である。

紫光閣は紫禁城西側の西苑内にあり、太液池の西岸に位置する。

もともと紫光閣は皇帝が軍隊を接見する場所であったが、西域の準回部を平定したことを記念して、乾隆二五年（一七六〇）に新たに殿閣が建てられ、中に武勲のあつた百名の肖像画を掲げた。その落成の祝宴は翌年の正月に行われ、以後新年恒例の行事となった。

北京の故宮博物院に乾隆画院の画家姚文瀚がこの式典を描いた「紫光閣賜宴図巻」が残っており、その有様を知ることができる。儀式の目的は、辺境の降伏者たちに清朝の武力がいかに強大であるかを見せつけることにあつた。そのためそこで展示された肖像画も、皇帝の意向を反映して、また殿閣に釣り合うように巨大で壮麗なものとなった。

この「紫光閣功臣像」については、最近研究論文が発表されている (Ka Bo Tsang, "Portraits of Meritorious Officials: Eight Exam-ples from the First Set Commissioned by Qianlong Emperor," *Arts Asiaticques* XLVII, 1992)。それによると、この功臣像は文官と武官を合せて百幅から成り、特に功績の大きい五十名の図には乾隆皇帝自身が賛をし、残りの五十図には劉統勲・劉綸・于敏中の三人が

賛を書いている。いずれの図にも題箋が貼付されており、それによつて図の次等がわかる。「閩相師像」の場合は「平定西域紫光閣次五十功臣像賛七 領隊大臣甘州提督閩相師」と書かれた短冊形の紙片（挿図）が外題としてついており、この図は次等の第七と確認できる。なおこの題箋は、本品購入時に修理改装を行ったために、現在では図から剥がした状態で保管している。

前記論文はこの功臣像の現存作を他に上等三点、次等三点の計六点報告する。一九八七年四月のサザビー・オークションにかけられた上等第一の傅恒像、カナダのトロントのロイヤル・オンタリオ美術館に収蔵される上等第四の納穆札爾像、天津市歴史博物館蔵の武名高い阿玉錫像は上等第三に挙げられている。また次等は、ニューヨークのメトロポリタン美術館に占音保像（順位不明）、ベルリンの東アジア美術館に第一八の巴岱像、先のロイヤル・オンタリオ美術館に那木查爾像（順位不明）が所在すると記す。

また東京大学東洋文化研究所の調査によつて、ベルリンの東アジア美術館には他に、次等第五十の哈木図庫像と次等の巴寧阿像（順位不明）が所蔵されているのが確認されている（「海外所在中国絵画目録改訂増補版・ヨーロッパ編」一九九二年。E一八—〇五九・

平定西域紫光閣次五十功臣象賛七 領隊大臣甘州提督閩相師

題箋

〇六〇)。結局、「紫光閣功臣像」は百幅のうち、上等三点、次等六
点の合わせて九点が現存することが知られるのであるが、この功臣
像は一九〇〇年の義和団事件の際に外国の軍隊によって掠奪され、
国外に持出されており、今後新たな作品が世に出てくる可能性も高
い。

さて、この肖像画の画風上の特色は、いずれもその写実的な面貌
表現にある。体軀や武具などは、明確な輪郭線で括り、弱い陰影し
か付けない伝統的な中国画法で描かれているが、閻相師の顔には西
洋絵画のような克明な陰影法が施され異彩を放っている。

こうした画法はイエズス会士の画家によって清朝にもたらされた
もので、この画の作者も郎世寧と伝えられている。郎世寧（一六八
八—一七六六年）は、ジュゼッペ・カステイリオネ（Giuseppe
Castiglione）の漢名で、イタリアのミラノ生まれのイエズス会士だ
が、康熙五十四年（一七一五）に来朝し、乾隆三年に北京で没する
まで清朝の宮廷画家として活躍した。

乾隆朝の西洋人画家は他に、フランス人の王致誠（ジャン・ドニ・
アッチレ、一七〇二—一七八年）や、ポヘミア出身の艾啓蒙（イグナ
ティウス・ジッヘルバルト、一七〇八—一八〇年）などがこの時には
いた。彼等は画家として乾隆帝の寵愛を受けたが、中国に渡ってき
た目的はキリスト教の布教にあり、いわば方便として皇帝の歡心を
買い家臣として作画に従事したのであり、宮廷画家としての活動は
必ずしも彼等の本意ではなかった。

彼等は中国絵画の主要ジャンルの山水・花鳥・人物いずれも手掛
けたが、乾隆皇帝がその写実的画風をとりわけ評価したのは肖像画
と画馬（馬の絵）で、乾隆帝は郎世寧らに自分の肖像画を描かせた
り、種々の駿馬図や、辺境を征討したときの戦闘図、あるいは宮廷
の式典図の制作を西洋人画家にたびたび命じている。それらは巨大
な画面に多数の人物が集い、その顔かたちが細部に至るまで克明に
描かれたものであったり、本図のように複数の図から成る大作が多
く、そうしたものは数名の画家が共同制作するのが普通であった。

それゆえこの閻相師像の制作にあたっては、文献の裏付けはない
が画風からみて、顔貌の部分は郎世寧らの西洋人画家が担当し、他
は中国人の画家が描いていると考えられる。同じ肉身でも顔と手の
描法は異なり、手は伝統的な輪郭線重視の画法で描かれており、衣
装や武具などと同様の平板な表現をとる。

最後に、皇帝が家臣の功績を讃えて、殿閣にその肖像を掲げる功
臣図の制作は中国の伝統に則ったものであることを指摘しておく。
古く、前漢の宣帝の甘露三年（紀元前五二）に、未央宮麒麟閣に十
一名の功臣の図を描き官爵姓名を記したことに始まり、後漢の明帝の
永平年間（五八—六九年）には南宮雲台に二十八人の功臣像を掲げて
いる。そして唐の貞観一七年（六四三）には閻立本が太宗の命を承
けて凌煙閣に二四名の功臣像を描き、その一部は北宋時代の石刻の
拓本によって今日に伝わる。その形式は基本的に紫光閣功臣像と同
じで、無背景の全身像で各人物を描き、上部に賛を添えている。

乾隆帝は満州族出身の皇帝だが中国文化に深く傾倒し、漢や唐に匹敵する大帝国を打ち建てたことを喜び、中華帝国における功臣像の伝統を踏まえて、紫光閣功臣像の制作を西洋人を含む宮廷画家に命じたのである。

(藤田伸也 ふじた しんや 大和文華館)